

“輝け！ひぐみっ子” だより

～東汲沢小学校教育目標「学びあい 高めあい まちとともにあゆむ ひぐみっ子」～

☎861-5531 <https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/higashigumisawa/>

子どもは育つ

校長 丹羽正昇

先日、PTA 本部役員の皆様のお計らいで、「校長を囲む会」を開催していただきました。私のようなものが、何をお話しすればよいのか悩んだ末、結局は自分が何者なのかを知っていただくと考えました。幼少期から現在に至るまでの、大したことのない自分史にもかかわらず熱心にお聞きいただき、参会された保護者の皆様には感謝しかありません。ありがとうございました。

今回、自分のいままでを振り返る機会を頂戴し、改めて思ったことがあります。それは、人には必ず転換期があり、そこではよい出会いがあるということです。私の場合にも、恩師と呼べる人との出会い、友達や仲間との出会いがあり、その都度、よい影響もそうでない影響も受けてきました。中でも、大切にしている出会いの一つに、教え子とのそれがあります。

私が小学校3年生の学級担任だった時の話です。その当時、なかなか授業が上手くいかず、自分の授業力のなさを痛感していました。ある日、一つの決断をしました。自分の授業のどこがいけないのかを、子どもに聞いてみよう。すると、出るわ出るわで、最終的に174個。私は、出た意見全てを黒板に書き、放課後にそれをしげしげと眺めていました。すると、一人の女の子が教室に入ってきて、私の肩をぼんっとたたくと、「先生、明日も学校来なよ!」と言って帰っていったのです。そのあとが大変でした。「ひよとしたら、担任が明日休むかもしれない。」と学級連絡網(まだあった時代です)が回り、学校にも電話がかかってきました。それは、学級代表の保護者の方から、「先生、明日も来ますよね。随分とひどいことを言ってしまったと、子どもたちが心配している。」という内容でした。私は「大丈夫です。明日も元気に登校します。」と、まるで幼い子のような返答しかできませんでした。翌日、教室の扉を開けると、登校時刻より前にもかかわらず全ての子どもがそろって、「やったあ。来た!」と大喜び。授業に悩む担任の気持ちを想像し、心の底から心配していたのが痛いほど伝わってきました。その優しさは、保護者を巻き込み、教師を動かしました。私は、胸が熱くなると同時に、この子どもたちに授業について相談してよかったと思いました。子どもを子ども扱いするのではなく、一緒に授業をつくっていくパートナーとして認め、その可能性に期待する。それこそが、教師の務めなのではないかと、それまでの自分を反省しました。

このエピソードののち、私は哲学者の鷲田清一さんの言葉に出会いました。鷲田さんは、「本来、子どもが育つ際の『学びの射程』は、私たち大人が考えているよりはるかに長い」と仰っています。「学びの射程」とは、未来に向けて学んでいく道のりのことです。それは、とてつもなく長い道のりであるから、大人が見えているぐらいの近い将来をもってして、子どもの可能性を見限るのは残念であると言うのです。私は、先程登場した子どもたちに教えられたことと同じだと思いました。当時3年生だった子どもたちと鷲田さんの言葉に出会って以来、私の中では子どもは「育てる」のではなく、「育つ」のだという信念ができてきました。

ひぐみっ子との出会いは、私の信念を一層強いものにしました。人が成長する学校という場では、大人が勝手にルールを敷くのではなく、可能性を示す学びの在り方とその必要性を模索していくことが大切である。そんな、本物の学びの中で子どもが育っていく学校にひぐみをしたい。令和2年の最終月にあたり、決意を新たにしました。